

世界文学全集 III-18

エルサ・モランテ

禁じられた恋の島

アンダルシアの肩掛け

大久保昭男 訳

河 出 書 房

世界文学全集Ⅲ-18 モランテ



© 1965

編集委員

阿部知二 伊藤 整
桑原武夫 手塚富雄
中島健藏

昭和40年6月5日 初版印刷

昭和40年6月13日 初版発行

定価 390円

訳 者 大久保昭男
発 行 者 河 出 孝 雄
印 刷 者 草 刈 親 雄
装 幀 原 弘

印 刷・中央精版印刷株式会社
製 本・中央精版印刷株式会社
本文用紙・日本紙業株式会社
同 納 入・東 邦 紙 業 株 式 有 限 公 司
ク ロ ー ス ・ 東 洋 ク ロ ー ス 株 式 有 限 公 司
同 納 入・株式会社石綿商店

発 行 所 東京都千代田区 株式 河出書房新社
神田小川町三の六 会社

電話東京 (292) (大代表)3711
振替口座 東京 10802

落丁本・乱丁本はお取替えいたします

目 次

禁じられた恋の島

献 辞

第一章 アルトゥロの夢

第二章 ある冬の午後

第三章 孤独の歌

第四章 星の夜

第五章 悲劇

第六章 運命の接吻

第七章 夏の終り

第八章 別離

アンダルシアの肩掛け

年 譜

解 説

一
三
四
六五
一二三
一六五
二二六
二五〇
二八七
三〇六
三六九
四二一
四二三

禁じられた恋の島

主要人物

アルトゥロ 本編の主人公である十五歳の少年。生まれおちると母を失い、父と二人でプロチダ島の廃墟のような、女人禁制の館^{むかた}で自然を友に野性的な生活をおくっている。

ウィルヘルム・ジェラーチエ アルトゥロ少年の父。ドイツ人を母にもつ三十六歳の男。たえず島を留守にしてはまた飄然^{ひょうぜん}ともどって来るといふ謎めいた生活をしている。

ヌンツィアタ アルトゥロの父が後妻としてナポリから連れて来た十六歳の女。継子アルトゥロのひたむきな慕情に心をうごかされるが、信仰心のあつい彼女は、その愛を拒む。

カルミネ ヌンツィアタの生んだ男の子。

シルヴェストロ アルトゥロを養育したナポリ生まれの下男。

アッスンタ ヌンツィアタと知合いの年若い寡婦^{かふ}。アルトゥロを誘惑する。

トニノ・ステツラ アルトゥロの父の男の愛人。プロチダ島の刑務所に収容されてくる。

ヴィオランテ ナポリに住むヌンツィアタの母親。

アマルフィ人 館のもとの住人だった老人。徹底した女ざらいで、アルトゥロの父を熱愛し、その館を譲り与えて死ぬ。

献 辞

レ・モ・Nに

きみが地上にただ一点信じたもの

その島こそすべてであった

執着し目を閉じるきみの目から

この無二の宝が奪われることはない

きみの初恋が瀆^とれることはない

純潔の島は夜に包まれている

黒いショールのジプシー女のように

北極の空に浮かぶ永遠の星

「どんなたくらみもそれに達することはない

アレクサンダーやエウリュアレより美しい

永遠に美しいやさしい若者たちが

わたしの友の眠りをまもる

あのおぞましい旗もうるわしい小島の

戸口を越えることはない

きみよ きみは知ることはない

多くの人びとのように

わたしの学ぶこの掟を

わたしの胸を砕いた掟を

《冥界の外に楽園はない》

第一章 アルトゥロの夢

……樂園は
遙けく高く……

(サンドロ・ペンナ「詩想」より)

王者と空の星

わたしの最大の誇りのひとつは自分の名前であった。アルトゥロというのが、北極の空に輝く牛飼座の中でもっとも動きが早くもっとも明るい星の名前（アルクツルス）であることを、わたしは早くから知っていた（そのことをわたしに最初に教えてくれたのは、彼であったと思う）。そしてまた、この名前は古代のある王の名前でもあった。この王は、彼自身と同じくすべてが英雄であった部下たちを統率し、彼らすべてを兄弟のように平等に扱った。

ところがやがて、この著名なイギリスのアーサー王（アルクツルスもアーサーも、）が実在の人物ではなく単に伝説上の存在であることを知るにおよんで、わたしの関心は

この王から他の実在の王たちへと移っていった（わたしには伝説などはたわいのないものに思われた）。だがそれにもかかわらず、アルトゥロという名前はわたしにとってはおかけがえのないものであった。それは、この名前をわたしに選んだのがわたしの母だったからである（母は、この名前のもつ意味などは知らなかったにちがいない）。わたしの母はあわれな文盲の女にすぎなかったが、わたしにとっては女王にもまさる存在であった。

実のところ、わたしは母についてはなにほどのことも、いやほとんどなにひとつ知ってはいなかった。というのは、母は最初の子供であるわたしを生み落とすとすぐに、十八歳にもならない若さでこの世を去ってしまったのだから。だから、わたしが知っていた母の面影は一枚の写真からえたものにすぎなかった。写真の母は、色あせてぼやけ、ほとんど幻のような横顔を見せているだけだったが、子供のわたしにとっては異常な渴望の対象だったのである。

街頭写真師のおかげで母は唯一の写真を残すことになったのだが、そこに写っている母は妊娠の初期らしく見えた。襷のついたたぶりの服にもかかわらず、その体はすでに妊娠の徴候を示しており、母は人目を恐れ恥

じらい、自分の体をかくそうとするかのように、小さな両手を前に組んでいた。きまじめそうな顔の黒い目の中には、田舎の娘や若い妻たちのほとんどに見られるあの従順さとともに、なにかに驚きおびえて問いかけるような表情がうかがわれた。それはまるでわたしの母が、子供を生もうとする女性に共通の期待とともに、永遠の無知と死という自分の運命を漠然と予見しているかのようである。

小島

ナポリ湾に浮かぶ島々はどれも美しい。

これらの島の土はほとんどが火山灰からなっており、とりわけ旧火口の周辺を中心に、わたしが本土では決して見かけたことのない種類の、無数の自然の草花が咲く。春には、丘はエニシダでおおわれる。六月ごろ、船で港へ近づくと、エニシダの甘く野生的な匂いが鼻をつく。

野原の方へひろがる丘の斜面には、古い城壁にかこまれるようにして、人けのない何本かの小道があり、そのかなたには、王宮の庭園のように見えるかどうかその他の果樹園がひろがっている。島には、細かく明るい砂の海岸がいくつかあり、さらに、大きな断崖のあいだにかく

れるようにして、小石や貝殻におおわれた、さらに小さい砂浜が断続している。海面にそり出た、切り立った岩に、鷗が巢を作っている。朝早く起き出たときにはとりわけそうだが、この鷗や野生のきじ鳩の、ときにはうったえるような、ときには楽しげな鳴き声があたりにこだましていく。海の風いだ日には、水はやさしくさわやかで、朝露のように砂浜に身を横たえる。

ああ！ もしもあの砂浜にふたたび帰り、あの水にたわむれることがわたしに許されるとしたら、わたしがなりたいと思うのは、鷗でもなければ海豚でもない。わたしは、かさご——海の魚の中でもいちばん醜いといわれるあのかさごになりたいと思う。

港付近の通りは、数世紀の歳月を経た田舎風の建物に囲まれた、日の射さない小路である。どの建物も貝殻のような色どりを帯びながらも、きびしく物悲しげなたたずまいである。明りとりほどの小さな窓のかたわらに、ブリキ罐に植えられたカーネーションや、こおろぎ用の虫かごとと思われるほどに小さい、きじ鳩を入れた鳥かごなどが見られたりする。店は山賊の洞穴のように深く暗い。港の喫茶店には石炭ストーブがあり、女主人がそこへ濃紺の瀬戸びきの湯沸しをのせて、トルコ風のコー

ヒ―を沸かす。この女主人は数年前にやって来て、今も喪服を着けている。黒いショールに、黒の耳飾り。ほこりに汚れた花ずな飾りと葉飾りでかこまれた亡夫の写真が帳場わきの壁にかけられている。

罪人キリストの記念碑の向かいにある宿屋の主人はふくろうを一羽飼っていて、この鳥は壁の上の方につき出ている桁に、小さい鎖でつながれている。羽毛は黒と灰色で、絹のように光沢があり、頭の小さい冠毛はとても形がよい。鱗は青く、大きな目は赤みがかった金色で、周囲に黒いふちがある。このふくろうは、自分のくちばしで自分のからだをついて時間を過ごすので、片方の翼にはいつも血がにじんでいる。その胸を軽く撫でてやろうとして手を出すと、ふくろうはおどろいたような表情の小さい顔を、その人の方へ傾ける。

夜になるとふくろうは羽根をばたつかせて暴れ、飛び立とうともがいては下に落ち、ときどきは、頭を下にしたままで小さな鎖にぶら下がり、力なく翼を動かしながら意識をとりもどしたりする。

島でいちばん古い、港の教会には、身の丈二十センチにも足りない聖女たちがガラスの聖遺物容器に入れられている。この聖女たちは黄ばんではいるが本物のレース

の服を着、色あせた錦織のマントラと本物の髪をつけており、袖口からは本物の真珠でできた小さい珠数が垂れている。死体のように青白い彼女らの小さい指の爪は、赤い糸のような線で描かれている。

ナポリ湾内の他の港にはいつも群れているしゃれた遊覧船や巡航船も、この島の港へはほとんど近づくことがない。島の住民の漁船を除いては、見られるのは舢舨や商いの小舟ばかりである。一日の大半、港の広場にはほとんど人影がない。左手のキリスト像近くに、貸馬車がたった一台、本土から来る連絡船の到着を待っている。この船は、ほとんどが島の人間である三、四人の客を降ろしては、わずかに数分停まっただけですぐまた出ていってしまう。周囲の島々へは、ナポリやその他の都会や世界のあらゆるところから観光客が押しかけるのに、この島の浜辺は、夏の盛りにさえも海水浴客のにぎわいを知ることもない。もしも偶然に他の土地の人間がこのプロチダ島に上陸することがあっても、ナポリ地方の名物として全世界に知られている、あの雑多で陽気な生活も、祭りのようににぎやかな往来の雰囲気も、歌も、ギターとマンドリンの調べも、なにひとつとしてここでは見出されないことに彼はただ驚くばかりである。プロチダの島

民は気むずかしくだんまりである。彼らの戸口はすべてが閉ざされていて、窓ぎわに出ている人はほとんどなく、どの家族も自分だけに閉じこもり、四囲の壁の中で暮らしている。この島では、友情は白い目で見られるのである。他の土地の人間の到来は、彼らに好奇心ではなく警戒心を呼び起こす。なにかをたずねられても、彼らは答えをしる。自分たちの秘密の中へ立ち入られるのを好まないからである。

彼らは東洋人のように、小柄で、肌は褐色で、切れ長の黒い目をしている。全部が親類ではないかと思われるほどに、互いによく似ている。女たちは古い習慣に従い、尼僧のようにひっそりと暮らしている。彼女らの多くは今も髪を長くし、それを編髪や巻髪に結び、頭にはショールをかぶり、服のすそは足まで届く。冬は木靴をはき、厚くて黒い木綿の靴下をまとう。けれども夏になると、一部の女たちは素足を見せる。こういう姿の女たちが、人と逢うのを避けながら、音もなく足早に歩く姿は、野生の猫か貂のようにさえ思われた。

女たちは決して海へ入らない。女が海で水浴びをするのは罪なのであり、他人が海に遊ぶのを見ることさえ罪なのである。

ときどき本の中で読む、封建時代の古い都市の家々は、谷あいや丘の中腹にむらがり、あるいは散在していて、一番高いところからそれらを見下ろしている城を一樣に振り仰いでいるかっこうである。それは羊飼の周囲にひしめく羊の群れに似ている。これと同じように、プロチダ島の家々も——下の、港付近のひどく密集した数多い家々であれ、あるいは丘の上のまばらな村落であれ、人里離れた数戸の部落であれ——遠くから望んだ姿は、まさしく城郭の足下に散在する家畜の群れにそっくりである。もっとも高い丘（この丘は、他の小さい丘のあいだに君臨していて、まるで山のように見える）の頂きに城郭がある。この城郭は何世紀ものあいだにおこなわれた増築によって、巨大な城塞の規模に達している。夜間に沖を通る船から見ると、プロチダ島は海中にそそり立つ要塞のかたまりとしか見えない。

約二百年ほど前から、この城郭は牢獄となった。おそらく全イタリアでも最大のもののひとつだろうと思われる。だから、遠隔の地に住む多くの人びとにとっては、わたしの島の名前はそのまま牢獄の名になったのである。

わたしの家は島の西側の、海に面した地点にあり、城

郭をかなたに眺めることができる。しかし、直線にして数百メートルの距離があり、そのあいだにはいくつもの小さな入江があって、夜になると、灯をともした小さい漁り舟の群れがあらわれる。距離にさまたげられて、かなたの無数の小窓の鉄格子も、城壁の上を行き来する看守たちの姿もはつきりと見分けることはできない。このために、とりわけ冬期、あたりに霧がただよい、あるいは空を駆ける雲が島の上に影を落とすときには、この城郭は、多くの古代都市に見出されるような、巨大な廃屋かとさえ思われる。蛇やふくろうや燕だけの住む、夢幻的な廃墟さながらである。

アマルフィ人ロメオのこと

わたしの家はけわしい丘の上に立つ一軒家で、周囲は熔岩性の小石の散らばる荒地である。建物の正面は村の方を向いており、丘のこの側の斜面は岩石からなる古い壁で支えられたかっこうになっている。この斜面に濃紺のとかがげが住んでいる。ここ以外には、世界のどこにも見られないとかがげである。右手に石と土からなる段々があり、平坦な土地に達している。

家のうしろには広い空地があつて、その先は切り立つ

たけわしい崖になっている。岩石のあいだを縫ってしばらくいくと、黒い砂の、三角形の小さい浜辺に出る。どんな細い小道もここへは通じていないが、砂利の上をはだしでここまで走り降りるのは容易である。この砂浜には小舟が一艘つながれていた。それはわたしの小舟で、アンティル水雷艇という名前であつた。

わたしの家は小さな広場からそれほど遠くはない。この広場はかなり都会風で、大理石の記念碑まで立ち、周囲に村の家々がかたまっている。しかしわたしの記憶の中では、この家は人里離れた場所にあつて、深い静寂があたりをつつんでいる。わたしの家は、そこに不気味に、しかも堂々と立っている。その姿は、島全体の上に虹色の巣を張りめぐらすかもしれない金色の蜘蛛を思わせる。

それは、屋根裏と地下室を数えずに三階建の館である（二十前後の部屋をもつ家はナポリでは少しも大きく見えないが、プロチダでは館と呼ぶ）。そして、ひじょうに古いプロチダの家屋の大半と同じく、この家の建築は少なくとも三世紀以前にさかのぼる。色はくすんだ灰白色で、全体の形はいかつい四角で、優雅さはない。窓の外についている、バロック式の円い格子や大げさな正面玄

関がなければ、田舎の大きい農家に見えるだろう。正面の唯一の飾りは、玄関の両側に配された二つの小さい鉄製のバルコニーで、格子と同じく、かつては白く塗られていたが、今はすっかり汚れ、さびついている。

正面玄関の大扉の一方に、小さなくぐり戸がくりぬかれていて、これがわたしたちのふだんの出入口になっている。二枚の大扉の方は開かれることは一度もなく、内側から扉を閉ざしている巨大な錠前は、すっかりさびついてしまつて使用に耐えなくなっている。このくぐり戸を入ると、窓のない長い石廊があり、そのはずれに、プロチダ島の館造りの様式にしたがつて、内庭につづく格子扉がある。この格子扉の左右には、多色焼ではあるがすっかり色あせた二つの立像が配されている。それがかたどっているのは頭巾をかぶったふたりの人間らしいが、それが修道士なのか、それともサラセン人であるのかはなんとも分らない。そして、格子扉の向こうにある庭は、普通の中庭のように屋敷の塀でかこまれていて、野生の緑の勝利をうたっているかのようにである。

わたしの愛犬イマコラテツラを葬ったのは、この中庭の、美しいシチリアいながまめの陰であった。

家の屋根に立つと、海豚に似たこの島の全景を見おろ

すことができる。小さないくつもの入江、牢獄、そしてかなたの海上にはイスキア島の青と赤の島影。さらに遠くには、いくつもの小島が銀色に光って見える。夜ともなれば、空の一角に牛飼座が浮かび、アルトゥロ星が光を放った。

ここに建てられてから二世紀以上のあいだ、わたしの家は修道院であった。この家が退屈で、はなやかなものをなにひとつもたないのはそのためであった。プロチダはいつも貧しい漁夫と貧しい農夫の島であり、数少ない館はどれもが必ず修道院か教会か城郭か牢獄であった。

後に、僧侶たちはよそへ移り、この建物は教会の手からはなれた。前世紀の戦争の期間やその後には、兵士たちの宿舎にも使われた。その後は住む者もなく、長いこと打ち捨てられたままだった。最後に、約五十年前、この島に立ち寄ったアマルフィ市出身の金持ちの探検家がこの建物を買とり、世捨人のようにしてここに三十年間住んでいた。

彼は建物の内部、とくに三階を改造しようとし、修道院以来の小室をなくするために壁をとり払い、四囲の壁には色のついた壁紙を貼った。わたしの時代には家は荒れ果て、ますますいたんではいたが、内部の配置や装飾

は彼が残していったときのままであった。家具類は、ナボリの小さな骨董屋や古物商の店で、絵画的ではあるが素朴な趣向によって集められたものらしく、野暮つたいロマンチズムの趣きを部屋に与えていた。そこへ入ると、曾祖母や祖母の昔に触れ、女の生活の秘密の匂いをかぐ思いがした。

ところが事實は、この家が建てられてからわたしたちが住むまで、この家の壁は女というものに一度も接したことがなかったのであった。

二十余年前、わたしの父方の祖父で、プロチダからアメリカへ移住していたアントニオ・ジェラーチェがいくばくかの資産をもつて帰つて来たときに、このアマルフィ人はすでにひじょうな高齢に達していたが、今なおこの古い館に住んでいた。いつからか彼は盲になつていて、人びとはそれを彼が女を憎んだためのサンタ・ルチアの罰だと言っていた。若いときから彼が女を嫌うことはひじょうなもので、実の姉妹をさえも近寄らせず、修道女たちが喜捨を乞ひに来ててもそれを外に立たせておくありさまだった。こうして彼は結婚もせず、女と顔を合わす危険の多い教会や商店へも出入りしないで通したのであった。

彼はしかし社会を敵視していたのではなかった。それどころか、彼はひじょうに氣前がよく、しばしば宴会や仮装舞踏会さえも開き、ときには狂氣の沙汰と思われるほどの浪費をもいとわなかったたので、やがてはこの島で一種の伝説にさえなっていた。しかし女たちは決して招待されることがなかったので、プロチダの娘たちはその神秘的なパーティに参加できる自分らの兄弟や許婚者をうらやんで、アマルフィ人の屋敷を、腹立ちをこめて男の館と呼びならしていた。

わたしの祖父アントニオは、二十余年の留守の後に故郷の島に上陸したとき、この男の館が自分の住居になる運命とは露ほども思わなかった。祖父はなんの交渉もなかったことのなかったこのアマルフィ人をほとんど覚えていなかったし、いばらやさぼてんにかこまれて立つこの古びた館は、彼が長い出稼ぎの期間に自分の住居として夢見ていたものとは少しも似ていたとは思えなかった。祖父は島の南部に、畑のついた小さい田舎家を買ひ、小作人だけを連れてそこへひとり住んだ。祖父は独身で、身寄りもなかったのである。

実を言えば、アントニオの近親者がひとりだけこの世にいた。しかし祖父は彼に一度も会ったことがなかつた。

た。それは、彼が移民生活のはじめごろに関係をもち、まもなく捨ててしまったドイツ人の女教師の生んだ彼の息子であった。捨てられて後も数年間は、この未婚の母は彼に向けて手紙を書きつづけた（祖父はドイツで働いた後、アメリカへ移っていた）。彼女はこのころ仕事をもっていなかったので物質的援助を求め、子供をさも愛らしげに書きつづけては去った男の心を動かそうと努力した。しかしこの時期には、祖父もひじょうに貧しく、それらの手紙に返事を出すことさえやめてしまったので、失望した彼女はついには手紙を書くことをやめた。やがて、年老いて子供もなしにプロチダに帰ったアントニオが昔の女を探し出そうとして知ったのは、彼女はすでに死に、十六歳になる息子がドイツに残っているということであつた。

そこでアントニオ・ジェラーチェは、自分の名前と遺産を相続させるために、その息子をプロチダに呼び寄せた。こうして、後にわたしの父になるはずの人物は、ジブシーのようにぼろをまとったいでたちでプロチダに上陸した（このことをわたしはあとで知った）。

彼は辛い生活を送ってきたものと思われた。幼いその心は、自分の父である見知らぬ男に対してのみならず、

無知なプロチダの島民全部に対しても敵意を抱いていた。またおそらく島民たちも、彼らの流儀で、この少年の激しい自尊心を傷つけたのに違ひなかった。確かなことは、無礼で冷淡な少年の態度は人びとの憎悪を招いたということである。息子の飲心を買おうと努める老人に対して、若者は残酷なまでに冷やかであつた。

プロチダで彼が好んで訪れた唯一の人物はアマルフィ人であつた。この老人はずっと前から宴会も接待もやめてしまい、失明のために傲慢と猜疑心をいっそうつものせながら孤独に暮らしていた。訪ねて来る人びとを追いつ返し、通りで近づいて来る者たちを杖でしりぞけた。老人の大きく悲しげな姿は人びとから憎しみの目で見られるようになった。

老人の家は、たったひとりの人間、すなわちアントニオ・ジェラーチェの息子のためにしか開かれなかった。

若者は一日の大半をその館で過ごすほどに老人と親密になり、彼のほんとうの父はアントニオ・ジェラーチェではなくアマルフィ人かとさえ思われた。老人の方でも一徹で激しい愛情を若者に傾けた。日課のような若者の訪問が遅れると、老人は道端まで迎えに出るほどになつた。それでも若者が姿を見せないときには、盲人の不安

にかられて彼は若者の名を呼んだ。噎れたその声はすでに死人の声であった。通行人がジェラーチェの息子の姿は見えないと言うと、老人は侮蔑をたたえながら銀貨や紙幣を路上に投げ捨て、それを拾った人が若者を呼びにいつてくれるのを期待した。そしてもし、その人がやがて帰って来て、若者は家にいなかったとしても言おうものなら、老人は人びとを促して島中を探させ、自分の犬たちをも放して若者を探させた。今や、彼の生活にとって、その唯一の友人とともにいるか、あるいは彼を待つこと以外にはなんの意味ももたなくなつた。二年後に老人は死んだが、彼は死ぬ前にプロチダのその家を若者の名義にしておいた。

それからまもなく、アントニオ・ジェラーチェも死んだ。その息子はマッサ生まれの身寄りのない娘とすでに結婚しており、ちょうど妊娠中のその妻を連れて丘の館へ引越した。そのとき彼は十九歳、その妻はまだ十八歳にならなかつた。この古い館が約三世紀昔に建てられて以来、女がそこへ住むのは始めてのことであつた。

わたしの祖父の家と畑へは小作人がそのまま住みつき、今もそのままである。

男の館

わたしの母はわたしを生むとすぐ、十八歳の若さで死んだ。母のこの夭折が世間の風説を生んだとは言わないまでも、それを裏づけることになった。この家の死んだ持ち主の怨霊がさまよつていて、女がそこに住むのはおろか、足を一步踏み入れただけでも命を奪われることになる人びとは噂していたのであつた。

わたしの父は村人のこの伝説に対し、嘲りのうす笑いを浮かべただけだつた。わたしもまた早くから、それを愚かしい迷信として軽蔑の目で見ることを学んだ。けれどもこの噂は島中にすっかりひろまり、わたしの家の女中になろうとする女はただのひとりもなかつた。わたしが幼かつた当時、わたしの家にはシルヴェストロという、ナポリ生まれの下男がいた。わたしの家に来たとき、彼は十四、五歳だつた。やがて彼は兵役を果たすためにナポリへ帰り、わたしたちの小作人のひとりが彼に代つた。この小作人は炊事をするのが仕事で、日に二、三時間だけ働いては帰つていった。部屋の大雑や汚れを気にするものは誰もなく、それはまるで屋敷の塀にかこまれた荒れ放題の庭にもひとしかった。

この庭（今は、わたしのかつての愛犬イマコラテツラの墓地になっているのだが）のたたずまいを、たとえ簡単にでも描いて見せることは不可能である。大きなごまめの木の下には、苔におおわれた家具の残骸や皿の破片やぶどう酒の大壺やボートのオールや車輪などが散乱し、それらのあるものは腐りかけていた。そして、あたりの小石や塵芥のなかに、とげのある、厚ぼったい葉の草が生えていた。これらの草の中にはときどきひじょうに美しいものが混っていて、それがわたしにはどこか異国の植物のように神秘的なものに思われたりした。雨のあとには、もっと上品な種類の草が無数の花をつけ、いつからとも知れずこの土の中に住みついている種子や球根がよみがえるのだった。そして、夏の乾燥期が来ると、どの草も、まるで火にあぶられでもしたかのように枯れしぼんだ。

暮らしには困らなかつたにもかかわらず、わたしたちは原始人のような生活を送っていた。わたしが生まれて二、三か月後に、父は六か月ほど島を留守にし、わたしは下男の手に移けられた。この最初の下男は年が若いのに万事につけひじょうに真剣で、わたしのことも山羊の乳で大切に育ててくれた。会話や読み書きをわたしに教

えてくれたのもこの下男であった。こうしてわたしは家で一応の教育を身につけ、家にある書物を読みあさるようになった。父はわたしを学校へやろうなどとは少しも考えなかつたので、いわばわたしは年中夏休みのような暮らしをしていた。とりわけ父が長く島を留守にするときには、わたしはなんの規律も日課もない、およそ気ままな毎日を送っていた。空腹と眠けだけが、わたしに帰宅の時間を思いださせるのであった。

わたしに小遣いを与えようと考えてる者もなかつたし、わたしも要求しなかつた。そもそも、その必要を感じなかつたのである。幼年時代をとおして、わたしは小遣いというものをただの一銭ももつた記憶がない。

祖父が残していった畑が、わたしたちの台所に必要なものを供給してくれた。わたしたちの料理人は、その技術から言つて、原始人や未開人とそれほど違わなかつた。名前をコスタンテといい、前任者のシルヴェストロ（ある意味で彼はわたしの養父であつた）が氣立てのよい男であつたのに引き代え、無口で粗野な男であつた。冬の夕べや雨の日には、わたしは本に読みふけた。海と野歩きについてわたしが好んだのは読書であつた。一日の大半、わたしはベッドか長椅子に身を横たえ、足